

広島 の記憶

写真家 明田弘司の
仕事から

七心ちやまいけ
あの頃。

あの日、あの時から

ヒロシマの人々は強く、明るく

たくましく生きてきた。

街のにぎわいや、日々の暮らしを切りとった情熱は

膨大な数の記録となった。

私たちは、先人たちがひたむきに描いた未来を

まっすぐに生きているだろうか。

写真は、なにを語るだろう。

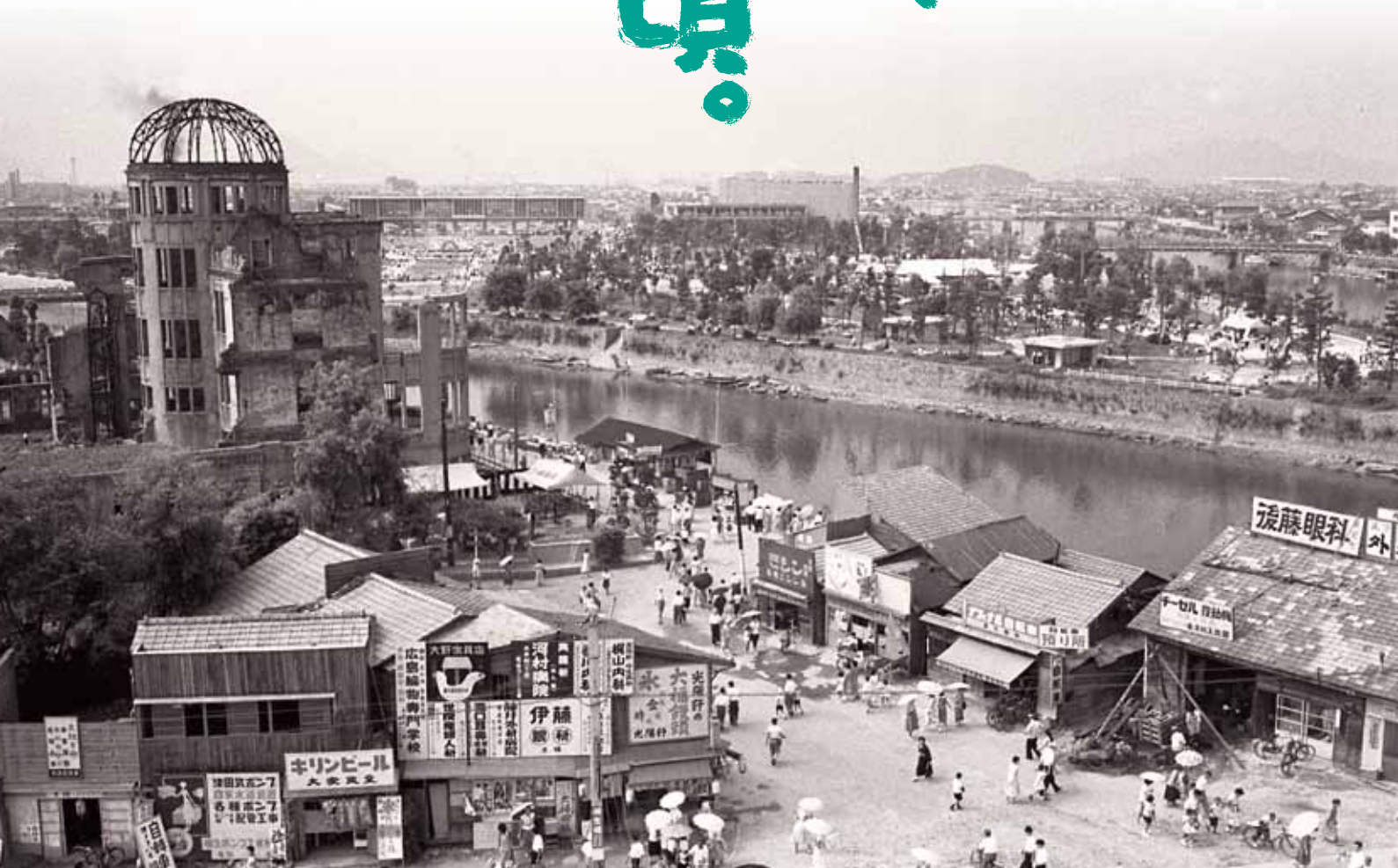
2014
7月16日(水)〜9月7日(日)

10時〜17時(入館は16時30分まで)
(休館日 月曜日(祝日7月21日は開館))

公益財団法人
泉美術館

エクセル本店5階
広島市西区商工センター123-1
TEL 082-276-2600

入場無料



被爆前の中島・大手町は市内随一の繁華な地域だった。
被爆後すぐに公園としての都市計画が決定されたが、もともとこの地に住み
生活を営んでいた人が戻ってきて、バラック住宅が建ち並んだ。

1957年(昭和32年)8月6日

公益財団法人

泉美術館

明田弘司写真展

戦争を生き抜いた人々の笑顔

かわいさ、おもしろさ、前向きな笑顔



夏になると市内の川には飛び込み台が設置された。子どもたちは学校行事の一環として川泳ぎを楽しんだ。1956年(昭和31年)8月4日 相生橋



孫と手をつないで歩くおじいちゃん、おばあちゃん。孫のかわいさは、いつの時代も変わらない。1954年(昭和29年) 八丁堀

その写真の前に立つと
一瞬にして当時の風につつまれる。
復興していく街のにぎわいや
子どもたちの笑い声まで聴こえてくるようだ。

ひたむきに広島を撮りつづけてきた
写真家 明田弘司が撮る世界は
特別な瞬間ではない。
ただ人々が力強く生き、笑い、躍動している。
日常を切り取った一瞬は、言葉以上に雄弁であり
私たちの心を揺り動かす。

勇気づけられる光景ほど、清しいものはない。



いつでもどこでも子どもたちは元気。子守りも遊びも上手だった。1954年(昭和29年)8月30日 草津町



当時、世の中で不足していたのは繊維関連の物資だった。山西商店は現在の(株)イズミ。山西商店の大きな看板は人目を引いた。1954年(昭和29年) 広島駅前(松原町)



世界平和記念聖堂は、原爆犠牲者の追悼と慰霊、また全世界の友情と平和のシンボルとして1950年8月6日に着工、1954年8月6日に完成。現在でもランドマークになっている。1953年(昭和28年) 鞆町小学校から撮影

「広島市は原爆ですべて焼きつくされた。元に戻るのにこれから何年かかるかわからないが、皆さんはそれを記録しなさい」1952年(昭和27年)、日本の報道写真・グラフィックデザインの源流となる「日本工房」の創設者 名取洋之助から数人が記録写真の教えを受けた。その言葉に心を動かされた、当時29歳の明田弘司は翌日から撮影を始めた。

1922年(大正11年)12月、呉市の劇場「弁天座」の四男として生まれ、幼少期からカメラで物を写して遊んだ。戦時中、中国で軍属として写真の仕事に従事。終戦後2ヵ月で帰国したが、呉市の生家は空襲で焼失。勤務していた広島市の会社は原爆で消失していた。1948年(昭和23年)、中区東千田町に「オリент写真工房」を開店。1954年(昭和29年)に「ヒロシマ・フォト・サービス」を新築。仲間たちと「ヒロシマ・フォト・クラブ」を結成し会長に就任。全日本写真連盟広島県本部委員長、広島県写真連盟会長などを歴任し、写真文化の発展に大きく貢献してきた。表彰歴は、広島市長表彰3回、広島県知事表彰、勲五等瑞宝章など多数。今年92歳。約3万8000点の写真は広島市公文書館に寄託された。

写真家

明田 弘司
AKEDA KOUSHI



昭和の広島を精力的に撮影していた35歳当時の明田弘司。今年92歳

公益財団法人

泉美術館

主催／公益財団法人 泉美術館・中国新聞社 協力／広島市公文書館

後援／広島県教育委員会・広島市・広島市教育委員会・中国放送・広島テレビ・広島ホームテレビ・テレビ新広島・広島エフエム放送・FMちゅーピー76.6MHz 企画制作／NPO法人 広島写真保存活用の会